

# 北東アジアのチュルク諸語研究

——日本からそそぐ北東アジアへの眼差し——<sup>1</sup>

藤 代 節

はじめに

1. 北東アジアのチュルク諸語
2. 日本におけるチュルク諸言語の研究：ソ連邦時代をはさむ100年
3. 北東アジアのチュルク諸語研究の現在：シベリアのヤクート語とドルガン語
4. 北東アジアのチュルク諸語にそそぐ日本からの眼差し

## はじめに

本稿の目的は旧ソ連邦領内シベリア地域に分布する北東アジアのチュルク諸語のおかれた現況を概観し、ソ連邦時代より日本から注がれた北東アジアへの眼差しを言語研究の点からまとめること、さらにソ連邦崩壊後、劇的に変化した北東アジアの諸言語研究事情について、特にシベリアのチュルク系言語、ヤクート語とドルガン語を取り上げ、やや詳しく述べることにある。あわせて、ソ連邦成立前にチュルク語研究分野で日露間の学术交流があったことに触れ、ソ連邦崩壊から20年近くになる今日の状況をふまえて、今後の北東アジア諸言語研究の動向をとらえたい。

## 1. 北東アジアのチュルク諸語

### 1-1. 北東アジアのチュルク諸語の分布と話者人口

チュルク系諸言語はモンゴリア高原あるいはその周辺を發祥の地とすれば、図1に見られるように、およそ30の言語として、概ね東西に分布域を広げた。現在、世界に約1億2千万人を越える話者人口を持っている。旧ソ連邦領内にはこれらチュルク系諸言語のうち24言語が分布している。図1において番号を○で囲ったものがやや広義にとった北東アジアに分布するチュルク語で、ヤクート（サハ）、トゥヴァ、カラガス（トファラル）、ハカス、シオル、チュリム・チュルク、アルタイの7言語である。この7言語に加えて、言語学的にはヤクート語の方言ともとらえ得るが、極北のドルガン人の言語、ドルガン語を加えた8言語を北東アジアのチュルク語として、まずこれら言語の現在の使用状況から概観していきたい。

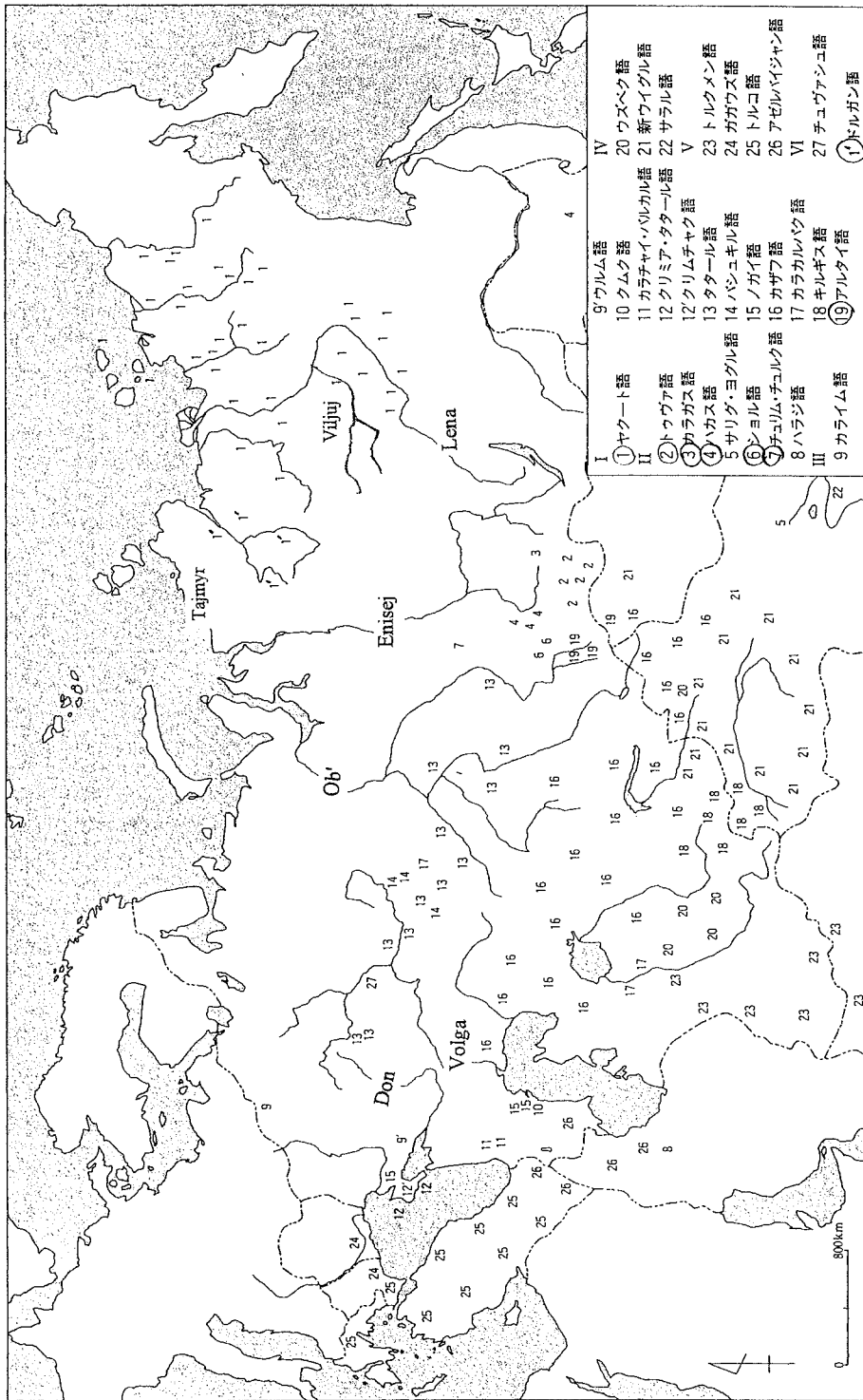


図1 チュルク諸語の分布  
庄垣内(1989)「チュルク諸語」に加筆作成

### 1-2. 北東アジアのチュルク諸語使用の現況

表1には北東アジアの8言語の話者人口を2002年に行われたロシア連邦国勢調査のデータから多い順に上げる。( )内はその言語を使用する民族の人口である。話者人口の方が民族人口よりも多くなっている言語については周囲の他民族出身者がこれらの言語を話すという状況が反映されていると考えられる。ヤクート語、トゥヴァ語は、北東アジアに分布する言語の中では、話者人口からすれば、他の言語に比べ有力な言語と言ってよい。

表1 話者数と民族人口

旧ソ連邦北東アジアのチュルク諸語話者数 [2002年国勢調査資料より] ( )内は民族人口<sup>2</sup>

ヤクート (サハ) 語	45万6288人 (44万3852人)	ショル語	6210人 (1万3975人)
トゥヴァ語	24万2754人 (24万3442人)	ドルガン語	4865人 (7261人)
アルタイ語	6万5534人 (6万7239人)	カラガス (トファラル) 語	378人 (837人)
ハカス語	5万2217人 (7万5622人)	チュリム・チュルク語	270人 (656人)

表1にみるようにその他の言語は、話者人口、民族人口共に少なく、民族人口の数値に占める話者の割合が相当小さい言語もある。北東アジア、シベリア域においては、大言語としてのロシア語の勢力が大変大きく、チュルク語話者に限らず少数派言語話者は、社会的心理的にロシア語の脅威に常にさらされている。とはいえ、北東アジアにおいて、チュルク諸語は全体としては、ツングース諸語や古アジア諸語等、他のいわゆる少数民族言語に比べれば、まだ数値上は有力と言える<sup>3</sup>。

これら北東アジアのチュルク諸語の実際の使用状況がある程度は反映していると思われるデータに、表2に掲げた1994年のデータ (*Российский статистический ежегодник*

表2 言語使用状況

(1994年マイクロ国勢調査データより)：各場面で何語を使うか (数値は%)

	家庭で		学校で		職場で	
	民族言語	ロシア語	民族言語	ロシア語	民族言語	ロシア語
ヤクート	90.7	9.3	75.2	24.8	76.5	23.4
トゥヴァ	95.6	4.4	70.3	29.7	69.8	30.2
アルタイ	74.3	25.7	49.8	50.2	56.7	43.2
ハカス	41.8	58.1	1.2	98.8	8.6	91.3
ショル	22.2	76.2	1.7	98.3	3.1	96.9
ドルガン	48.7	33.3	2.9	73.8	18.9	63.5
カラガス (トファラル)	20.0	80.0	—	100.0	—	100.0
チュリム・チュルク	13.3	86.7	—	100.0	—	100.0

1999 (1999), pp. 68-70) がある。

表中のデータは、家庭内、学校、職場の各場面で、ロシア語と自民族の言語のどちらを使用するか、をまとめたものである。このデータによればカラガス語とチュリム・チュルク語については家庭内を除いて、100%ロシア語使用に移行してしまっている。話者人口の多いヤクート語と、話者人口の少ないドルガン語やシオル語を比較すれば、各言語の使用状況の違いが如実にわかる。北東アジアのチュルク語全体を見ると、ヤクート、トゥヴァ、アルタイの3言語は比較的家庭内で使われているものの、学校や職場においてはかなり使用率が低い。表3には、1989年の国勢調査のデータから、「自らの民族集団の言語を母語とみなしている率」として統計データにあげられる数字、即ち「母語保持率」や「母語みなし率」と呼ぶ数値と表2の家庭内で自民族言語を使用する率を並べて掲げた。

表3 母語保持率  
(1989年国勢調査<sup>4</sup>) と家庭内使用言語 (1994年マイクロ国勢調査) (数値は%)

	母語保持	家庭内で			母語保持	家庭内で	
		民族言語	露語			民族言語	露語
ヤクート (サハ) 語	93.8	90.7	9.3	シオル語	56.7	22.2	76.2
トゥヴァ語	98.5	95.6	4.4	ドルガン語	81.7	48.7	33.3
アルタイ語	84.4	74.3	25.7	カラガス (トファラル) 語	43.0	20.0	80.0
ハカス語	76.1	41.8	58.1	チュリム・チュルク語 <sup>5</sup>	—	13.3	86.7

自民族の言語を母語とみなす割合、即ち母語保持率と家庭内での自民族言語使用のデータを比較し、1989年と1994年の5年間の時間差を考慮せずに比較するならば、母語と見なすことと実際に使用する言語とは随分隔たりがあることがわかる。ハカス語の母語保持率76.1パーセントに対して、家庭内で実際にハカス語を使うパーセントは41.8%であり、ドルガン語については81.7%の母語保持率に対し、家庭内使用率は48.7%である。

一方、ヤクート語、トゥヴァ語のように家庭内での言語使用率に限って言えば、高い率で、ほぼ同数値という言語もある。このように言語によって差異の帰因するところとしては、様々な可能性が指摘できる。たとえば、当該民族言語話者等の生活環境における大言語、すなわちロシア語話者との日常的な接触が密であることがまず挙げられる。ヤクート語話者についてはヤクート (サハ) 共和国<sup>6</sup>の全人口中、ヤクート人の割合は33%、トゥヴァ共和国におけるトゥヴァ人は64%、アルタイ共和国ではアルタイ人30%、ハカス共和国では11%という数値がある (2002年データ)。さらに、生業の現場の言語使用状況はどうか、また当該民族集団が閉鎖的か開放的か、などの要因が考えられる。絶対的に民族人口が少ない言語話者は学校教育や職場で必然的にロシア人をはじめ、他民族出身者と接する機会が多く、民族際語としてロシア語使用に移行せざるを得ない状況であることは明らかである。また、ロシア人もしくはロシア語話者との婚姻により、家庭の中でもロシア語

使用に移行する傾向が加速するのは自然である。グラスノスチ、ペレストロイカがスローガンとなり、政治・経済体制が変革へと揺らぎ出したソ連邦崩壊前後より、話者等の日常生活環境も変化したであろうことを考慮すれば、これらの北東アジアの言語使用状況は、この20年程はかつてない動きのある時期であったといえよう。

### 1-2-1. 北東アジアのチュルク諸語研究の動向：ソ連邦崩壊と日本語学

1991年にソ連邦が崩壊し、それ以前には国外の研究者にとって直接に言語調査を行うことはおろか、渡航そのものが困難であった北東アジア地域を対象とした研究活動は大きく変化した。ソ連邦時代には、たとえば上記の1989年の国勢調査データとして出版された数値により各言語の使用状況を推測するのが一般的であったが、直接に更に詳しい調査を行うことが連邦崩壊後は可能となった。北東アジアの少数派言語において、今後考えられる使用状況の変容を研究することは言語の生態研究という点でも非常に興味深い問題である。そのためには、詳細な社会言語学的調査が必要となる。つまり、ヤクート語を例に取って言えば、職場でのグループにロシア人とヤクート人が何人かいる場合、ヤクート人が全員ロシア語を躊躇なく利用するか、ロシア人がグループ内にただ一人の場合はどうか、また、ヤクート人同志のグループにおいてはどうか、男女間で使用状況に異なりが認められるか、等、もし言語のスイッチが生ずるとすれば、何を契機にそれが生ずるのかを細かい場面設定で調査すれば、言語の生態を捉えることができるのではないか。また、学校現場においても、学年毎にどう推移していくのか、教師がロシア人の場合、ヤクート人生徒の使う言語はどうか、逆に教師がヤクート人の場合、ロシア人生徒の使う言語はどうか、等、様々な視点での調査を検討することができる。網羅的な調査は困難であっても、2言語併用の環境で実際にどのように言語使用が変化していくのかを詳しく確かめることが可能になった。社会言語学的な調査は、一般の人々から調査データを集めることになるので、そもそも安易に着手はできないが、連邦崩壊後、10年以上の月日がたち、このような社会言語学的な詳細な調査研究が、近年では徐々に可能になりつつあると感じられる。

## 2. 日本におけるチュルク諸言語の研究：ソ連邦時代をさむ100年

### 2-1. 日本におけるチュルク諸言語研究：ソ連邦崩壊前後（1980～90年代）

#### 2-1-1. 現代チュルク諸語の研究

1917年に帝政ロシアに社会主義十月革命がおこり、1922年にソビエト社会主義共和国連邦が成立した。その後、約70年に及ぶソビエト政権下において、北東アジア域を含め、ソ連邦全体が長い間、所謂鉄のカーテンに覆われた。とはいえ、ソ連邦崩壊以前にもソ連邦内のチュルク系言語に関する研究や情報が日本国内でも知られていなかったわけではなく、ソ連邦内の諸言語の中でチュルク系言語関係の情報は、むしろかなり広くカバーされていたといってもよい。たとえば、『三省堂言語学大辞典』<sup>7</sup>（世界言語編）全4巻（1988-1992）

には個別のチュルク系言語項目やチュルク系言語全体を対象とした項目「チュルク諸語」もふくめ、30を越える見出し項目が取り上げられている。これらは、チュルク系言語について考察、研究を始める際には、参照必須の文献である。しかし、これらチュルク系言語関連の項目は30余に及びながら、執筆はわずかに2名による<sup>8</sup>。1993年に出版された同辞典の『補遺編』にエイヌ語がのっているのを別にすれば、この大辞典が出版されたのは1988年から1992年にかけてであり、原稿準備は概ねソ連邦崩壊直前になされたと考えられる。その時期に日本国内においてこれらチュルク系諸言語の多数派を占めるソ連邦領内の言語を解説するためには、当然のことながら、一次資料を以てするのは、ほぼ不可能であった。ソ連邦で出版された概説書や研究書などを利用して原稿が準備されたと聞いている。ソ連邦時代には一般の人々はもちろん、大学やアカデミーなどの研究機関で言語研究に携わる人々も個人的に国外の研究者らと接触することは避けていた。

上記のような日本におけるチュルク系言語研究を取り巻く状況が、連邦崩壊により、大きく変化した。図1に掲げた通り、チュルク系の言語の大半が旧ソ連邦の版図内にあり、チュルク系言語話者が中心の人口を占める中央アジア諸国も、かつてのソ連邦構成15共和国の中にあつた。これらの国々も1991年末までに次々に独立し、旧ソ連邦が文字通り崩壊した。旧ソ連邦構成共和国諸国においては特に社会体制が急激に変化し、その影響は言語学の世界にも波及し、チュルク系諸言語研究においても大きな変革を来した。中央アジアをはじめ、これまで言語調査が困難であった地域にも赴き、実際に言語調査を行い一次資料を集めることができるようになった。また研究者等と直接のコンタクトをもつことが可能になり、一次資料をもちいた研究成果が日本発信で陸続と発表されるようになった<sup>9</sup>。このようにして、中央アジア域の諸言語研究者が日本国においても育ち、後述するように北東アジアのチュルク語研究に携わる者も出てきた。

### 2-1-2. 古代チュルク語の研究

連邦崩壊後、チュルク諸語研究の進んだ分野として、現代語に加えて、古文献の研究がある。ロシアには、かつて帝政ロシアが19世紀末から20世紀初頭にかけて中央アジア地域から将来した古語による文献が大量に保管されている<sup>10</sup>。ソ連邦時代はこれらの文献もソ連国内の研究者が専有的に研究に使用しており、特に旧西側の研究者等が直接に文献に近づくことはほとんど不可能であった。この点も連邦崩壊後に大きく変わった。国外の研究者が、これら古代語文献を閲覧、研究対象とすることが徐々に可能となり、チュルク系言語の研究においても古語文献の研究が大いに進んだ。この研究分野においてはロシアには革命前に W. ラドロフ(次節参照)による一連の研究があつたが、ソ連邦時代になってからは、大量に将来された貴重なウイグル語文献も、あまり活発に研究されたとは言えない。連邦崩壊後は、未整理で手つかずのウイグル語文献について日本人の研究者によって次々に研究成果が発表されるようになり<sup>11</sup>、日露の共同研究の機会も増えたことは、チュルク

系の古代語研究において大きな意義があった。特にイギリス、フランスなどが将来したウイグル文献の研究で既に大きな成果を挙げていた庄垣内正弘が連邦崩壊後、ロシア科学アカデミー東方学研究所のウイグル文献を扱った研究を提出し、古代チュルク語研究は急速に発展した<sup>12</sup>。このことはソビエト時代には政治体制により西側と東側に分断されていた古代語文献研究の学界に垣根がなくなったことを表している。

## 2-2. ソ連邦成立直前の最初で最後の日露学術交流

### 2-2-1. W. ラドロフと羽田亨

革命前のロシアには、チュルク語研究者ラドロフ（ドイツ名 Friedrich Wilhelm Radloff、ロシア名 Радлов, Василий Васильевич、1837-1918）が活躍していた。20世紀のはじめ、つまり、ソ連邦成立の前夜に日露のチュルク研究者間の学術交流があったことを紹介しておきたい。周知のように19世紀末から20世紀のはじめにヨーロッパ諸国では中央アジアの探検調査、文物の将来が一大ブームとなり、競争が繰り広げられた。ロシアもその中に入った。一方、日本でも、やはりこの地域への関心は高く、1902年から1914年にかけて3度にわたる大谷探検隊の活動があった。その大谷探検隊の将来した古代チュルク語文献のうち、最長の405行をもつ手書きのウイグル語文献について、並大抵では及ばぬ同定作業を行い、その内容が『天地八陽神呪経』にあたることをつきとめたのが、日本の羽田亨（1882-1955）であった。全テキストの転写と翻訳を完成した羽田のこの業績は、当時の日本国内はもちろん、欧州においても刊行されていたウイグル文献の研究の中で量質ともに第1級のものであった。このとき32才の羽田は自らの『天地八陽神呪経』研究のレビューを目的にラドロフ（当時76才）を訪ねてロシアへ渡航した。ラドロフは当時、サンクトペテルブルグの民族学博物館館長の職にあった。ラドロフは出身はドイツ国であったが、ロシアに移住し研究生活を送った。その研究は、広くチュルク語全般にわたり、一時、北東アジア域のアルタイ地方やバルナウル地方等にも長期に滞在し、南シベリアのチュルク系諸言語の調査研究を精力的に行った<sup>13</sup>。北東アジアのチュルク語、ヤクート語についての論文も発表している。ラドロフは古語も現代語も研究対象とし、やがて、チュルク語全般を扱った大部のチュルク語方言辞典<sup>14</sup>を編纂し、「チュルク言語学の祖」と称される研究者であった。羽田はこのラドロフを大変尊敬しており、ロシアへたずね、ウイグル古文献について研究討議を行ったのであった。革命前の1914年のことである。このとき羽田はウイグル文『金光明最勝王経』についてラドロフと共同研究も行っている。ここに共にアジアへの関心の高まりを背景として持つ日露の言語研究者が、特にチュルク語の当時最先端の研究を携えて、学術交流を持ったのであった。これがおそらく、チュルク語研究において日露間の最初の学術交流であり、1917年の社会主義十月革命前の最後の交流であったと思われる<sup>15</sup>。ラドロフの勧めで、羽田の『天地八陽神呪経』の研究を英訳し、ロシア帝室アカデミーから出版する計画があったが、第一次世界大戦と十月革命の勃発、1918年のラドロフの死によ

り実現しなかった。そうして、その後、70年間に及び厚い鉄のカーテンが閉じられたのであった。

### 2-3. 旧ソ連邦地域とその周辺域の諸言語研究

このようにチュルク語や旧ソ連邦領内の言語についての研究は、日本において連邦崩壊前後で様相を変えたが、実は連邦崩壊後の一連の動きは旧ソ連邦に限ったことではなく、同じ頃から中国などでも、これまで調査はおろか訪れることさえ、決して簡単にできなかった少数民族言語使用域、例えば、南方の川西走廊地区などでも徐々に調査研究が可能となっていた。この状況をうけて、チベットビルマ系の少数言語、例えば、モソ語、ロ口語、パイ語、ダバ語、等々について日本の言語学者等が活発に研究対象とするようになった。ソ連邦崩壊による政治体制変革の動きに連動して、ユーラシアの中央、北東域で、20世紀の終わりを迎えて、若手研究者を含む国外の研究者にも頻繁に門戸を開くようになり、このことが北東アジアを含めアジア全域の小言語の研究を進める大きなきっかけとなった。一方、この現象が進んでいた1993年を国連が「世界の先住民の国際年（国際先住民年）」とし、1995年～2004年を「世界の先住民の国際の10年」として、様々なキャンペーンをおこなった。その中で、先住の人々の自民族言語使用の権利を尊重する気運が高まった。これをうけて、日本においては、かねてからも行われていた日本国内のアイヌ語等のみでなく世界各地の小言語を対象にした言語学分野の研究がさらに進んだ。大言語に押されて、社会生活における使用場面が狭まり、話者人口が急速に減り続ける「消滅の危機に瀕した言語」（日本ではこれらの言語を「危機言語」とよぶ）の研究に速やかに取り組むために、若手をも含む言語学者を危機言語の使用域へ調査に派遣する大型プロジェクト<sup>16</sup>が発足した。また日本言語学会も「消滅の危機に瀕した言語の小委員会」（1994年発足、1997年から「危機言語小委員会」）を組織し、この動きを支援するなど、日本国内においても世界中の危機言語について関心が集まった。

このような背景に、危機言語を多く抱える旧ソ連邦北東アジア地域の言語研究は大きく進展していった。野外調査による言語データの採集とその記録、分析、同時に現代語記述研究あるいは言語類型論研究など、多角的に研究が進められた。さらに上でも触れたように社会言語学的な調査の可能性を模索しながらの言語生態研究等を連邦崩壊後の言語学研究の動向として指摘できる。

## 3. 北東アジアのチュルク諸語研究の現在：シベリアのヤクート語とドルガン語

### 3-1. シベリアのチュルク語とその研究状況

ここでは、北東アジアのチュルク語の代表としてヤクート語とドルガン語を中心にこれら言語の現在の使用状況と研究について、帝政ロシア及びソ連邦時代の両言語の状況にも言及しながら、やや詳しくみていきたい。



### 3-1-1. ヤクート言語語コミュニティの成立とドルガン語形成

ヤクート語は、図1でも見たように、同系統のチュルク語の大半が中央アジア域から東西に移動、すなわち緯度に沿って広がった中で、唯一、遠く北方へ経度に沿って移動した言語である。ヤクート語の移動については、未だ詳細は明かになってはいない。考古学の情報などから、10～13世紀頃にバイカル湖の周辺に居住し、ブリヤート語を話す人々等、モンゴル系の人々と接触していたのではないかとされている。その後、徐々に北方へ移動していき、少なくとも1632年に帝政ロシア政府がレナ川中流域河畔のヤクーツクに城塞を築き、この地方を支配下に収める頃にはすでに東シベリアで勢力を持っていた。ヤクート人が現在の地に至る契機はモンゴル帝国の勃興とおそらく無関係ではなく、北方への移動は、13世紀頃には始まっていたのではないだろうか。このヤクートコミュニティの移動は、先住のツングース系をはじめとする人々のコミュニティにも大きな影響を与えることとなった。牧畜業を主要産業とするヤクート人は、レナ川沿いに移動して、現在の地に入植する際に、ツングース系の人々から、地形や植生や気候などが牧畜業に適した地であるかどうかについて情報を得ていたと思われる。ユーラシア各地にチュルク系の人々が移動し、各地でチュルク語使用が広がったことを「チュルク化」が生じたとすれば、ヤクート人の移動は、北東アジアのチュルク化ということになる。ヤクート人が北方へと移動し先住するツングース系の人々をチュルク化していく過程で、チュルク化がいよいよ最終段階を迎えたのが、現在のドルガン語コミュニティである。これは極北の民族集団ドルガンの形成によって成し遂げられた。ドルガン語はタイムルに先住していたツングース系エベンキ語を話す人々やサモエード系の言語を話す人々と、ヤクート語を話す人々さらにこの地にヨーロッパロシアから集まって来たロシア人がリングフランカとしてヤクート語を選択することにより17～18世紀頃に形成された言語である（図2）。

ヤクート語とドルガン語は、帝政ロシア時代～ソ連邦時代～連邦崩壊後を通してどのように研究され、またソ連邦崩壊は日本からのこれら言語の研究活動に具体的にはどのような

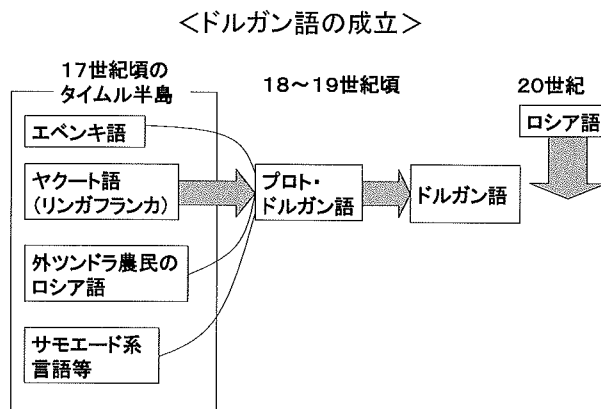


図2

な影響を与えたか、について次節で述べたい。

### 3-1-2. ヤクート語・ドルガン語の研究状況(帝政ロシア～ソ連邦)

ヤクート語という言語名称は、ロシア語の якутский язык を写したもので、近年はヤクート人の自称 саха を尊重して、サハ語と呼ぶことが頻繁である<sup>17</sup>。実際は、このサハもヤクートも元々、同一のチュルク語彙、\*yaqa 「端」、「縁」に遡るものである<sup>18</sup>。日本語では、サハ語、ヤクート語ともに使用されており、それぞれに特に付加的な意味はない<sup>19</sup>。もっとも、サハ語という名称が日本で使用されるようになったことは、日本からの研究者がヤクート語圏で直接にヤクート語話者と接触することが可能になったことの現れと見ることもできる。

表4には、ヤクート語とドルガン語の研究状況などの概要を時代を追って示した。ヤクート語の研究は、ロシアにおいては長い伝統がある。帝政ロシア政府のシベリア進出を機に、最初にロシア正教関係者が、また革命を控えた19世紀にはシベリアに流刑になったヨーロッパからの政治犯等が、ヤクーチヤ各地において、語彙やフォークロル資料の収集にあたり、大きな成果を後世に残している。これらの人々の中には言語データの記録のみでなく、データを整理分析し、文法書や辞書を著す者もあった<sup>20</sup>。さらに帝政末期からヤクート人の中には当時の首都ペテルブルグに赴き、ヤクート語アルファベットを作成する者も現れた<sup>21</sup>。一方のドルガン語は、言語の形成が17～18世紀頃であり、極北の辺境の地にあったことや話者集団が小さかったため、革命前には、ドルガン語というよりも、むしろヤクート語のタイムル方言として存在している状態であった。

ソビエト時代に入り、ヤクーチヤはソビエト連邦内の自治共和国となり、特に1920年代から1930年代半ば頃までは活発にヤクート語による文化活動が国策にも沿う形で行われた。その活動の担い手はロシア人のみではなく、ヤクート人からも多く輩出された。

表4 ヤクート語とドルガン語に関する研究活動

	ヤクート語	ドルガン語
帝政ロシア時代		民族の形成(17-18世紀)
↓	ロシア正教関係者による記録活動 シベリア流刑囚による記録活動 ロシアアカデミーによる調査研究 等	ヤクート語をリンガフランカとして選択的に受容する
ソ連邦時代	ソ連邦科学アカデミーを中心としての言語研究	ヤクート人、ロシア人研究者による記録活動
↓	担い手はロシア人研究者、ヤクート人研究者 文字の作成と普及、口承文芸等の記録活動 規範文法と辞書の整備、文学書の出版	ドルガン人による文字の作成 文学作品の誕生
連邦崩壊後	上記の研究者等に加えてロシア国外の研究者が研究活動に積極的に参加 国外との学術交流 サハ共和国国内での研究活動の活発化	ドルガン人研究者による 文字教育の普及活動 言語保持への危機感 国外との学術交流

1920年代～1930年代にはラテン文字に基盤をおいたヤクート語文字が使用され、おおいに教育活動も広がったその後、1939年よりロシア文字基盤のヤクート語アルファベットが導入された<sup>22</sup>。1950年代頃よりソ連邦科学アカデミーシベリア支部ヤクーツク分所（1947年に開所、1949年から活動を始める。シベリア支部は1957年に開設）に組織された「ソ連邦科学アカデミーシベリア支部ヤクーツク分所 言語・文学・歴史学研究所」を中心に規範文法の整備や辞書類などの作成に力が注がれ、今日までその伝統は続いている。また同時にヤクート人に伝わる英雄叙事詩オロンホはじめ、謎々なども含めた口承のフォークロール資料の記録活動が一時期、盛んに行われた。もともと、フォールロール資料についてはあまり活発な出版活動には結びつかなかったようである。個別の文法研究や方言学についての業績もヤクート人研究者によるもの、ロシア人研究者によるもの共に他のシベリアの諸言語に比すれば、格段に多くあげられている。

一方、ドルガン語は、標準ヤクート語に近いということもあり、文語はヤクート語文語で代用する時期が長く続いていたが、1981年に独自のアルファベット（キリール文字基盤）がドルガン人により作成され、いくつかの修正などを経た後、アカデミーシベリア支部において、ドルガン語アルファベットとして認められた。このドルガン語アルファベットにより初等読本が1990年に出版され、学校教育で用いられるようになった。隣接するヤクート語の優勢であることにも影響され、話者人口が約5,000人というこの規模の言語集団のシベリアの言語としては使用される程度が高い。民族の伝統的生業（トナカイ飼育）の形態（家族経営による遊牧）も関係しているのかもしれない。ヤクート語と同様、ドルガン語についてもロシア人、ヤクート人言語研究者等による調査研究成果がこれまでに発表されている。ヤクート語、ドルガン語はチュルク系言語全体から見ても、チュルク本来から逸脱した文法形式をもつなど、非常に興味深い研究対象であるが、ソ連邦時代を通じて、タイムルはもちろん、ヤクーチヤも国外の研究者にとっては、直接に訪れることの非常に難しい地域で有り続けていた。

### 3-1-3. ヤクート語・ドルガン語研究状況（ソ連邦崩壊後）

前節で見たように、ヤクート語、ドルガン語はヨーロッパロシアにおいても、現地においても他の北東アジアのチュルク諸語と比べれば、これまでよく研究対象となっているが、連邦崩壊後、先行する研究活動に加えて、日本からも研究活動への参加があり、学術交流が大いに進むこととなった。日本側にとって、これまでの2次資料に頼らざるをえない状況から、確認したい文法規則や現象、細かいニュアンスを伴う語義の直接的な調査、社会言語学的な情報を得るために現地で行う実際の使用域観察、など様々な研究の可能性が広がった。例えば、江畑冬生による一連の文法研究はソ連邦・ロシアでのヤクート語研究において未解決の部分を扱い、広く一次資料にあたり、研究を展開し、解決が図られている（参考文献、江畑（2004-6）参照）<sup>23</sup>。また江畑は東京外国語大学アジアアフリカ言語文

化研究所主催の2006年言語研修において、サハ語研修を担当した。一ヶ月以上続く研修に日本各地から10名を越える受講生の参加があったことは、ヤクート語への、またこの地域への深い関心を示している。この研修のために編まれたテキスト(音声CD付き)は、江畑とヤクート語のネイティブスピーカーであるナヂェージダ・ポポーヴァ Надежда Попова との共著で、理解し易く編まれている。研修には、ヤクーチヤからヤクート語研究者を招聘するなど、研究者同士の直接の交流を反映する工夫が効果的に図られていた。このような学術交流が可能となったのも連邦崩壊後、現地の社会体制が変化したことによる。

ドルガン語についても、ソビエト政権下では長く外国人が訪れることの許可されなかったタイムル半島に、連邦崩壊直前から、特別なビザの取得は求められるものの渡航することが可能となり、日本からも直接に言語調査に出かけることができるようになった。筆者は、1991年夏にタイムル半島に赴いて、ドルガン人出身の詩人であり作家オグド・アクショーフ Огдо Аксенова (1936-1995) の知己を得、また現地の教育関係者等との交流を持った。これらの直接的学術交流により、現地の言語情報を収集し、共に出版物を刊行する機会を得ることもできるようになった。オグド・アクショーフは、先に述べたドルガン語表記法作成者の一人でもあり、自らのドルガン語による作品を初めて書籍にした文学者である。アクショーフによる初めてのドルガン語詩集の最初の詩から冒頭の部分を以下に紹介したい。

**МИНИЭНЭ МУОРАМ**

Аллараагы тыалынан  
Аңкаһнаан арбаһныыр,  
Ыһысканнаак тымныннан.  
Быс көрдүк ыһыактыыр.  
Дьэ оннук эрэ диэмэ  
Дулгаанныыр дойдубун.

わたしのツンドラ O.Aksenova/拙訳  
川下の風が吹いたなら  
ぞっとするほど身も凍る  
ものすごい寒さには  
煙のようにとめどがない  
ああだけどそんなふうには語ってくれるな  
我がドルガンのふるさとのことを

Үрүң көмүс каарынан  
Үллүйэн таптайар,  
Кыһыл көмүс ыйдыңам  
Каныылаһан киэргэтэр.  
Талылар тылларынан  
Таптыбын тһам һирин.

しろがねの雪  
降り重なりてたおやかに  
こがねの月とここに照り  
二つそろって華やぐところ  
ことばを尽くして語りたい  
我がツンドラのふるさとのことを

(以下、略)<sup>24</sup>

ヤクート語文語では表すことが難しかったアクションノワの作品は、特に現地のドルガン語話者にストレートに伝わり、大変な人気を博し、ロシア語訳のものも含め、ソ連邦時代から20点余に及ぶ詩集や作品が単行本として出版されている。彼女が1995年に没したのち、その作品集を日本で、ドルガン語で書かれた作品のオリジナル、その日本語訳、ロシア語訳をまとめて、タイムルの研究者やモスクワの文学者等と密な連絡や打ち合わせを重ねて刊行することが出来た<sup>25</sup>。

このような一連の研究活動が可能となった背景には、ソ連邦崩壊前後から、日ソ、或いは日露間の学术交流、特に人的な交流が活発になったことが背景にある。例えば、1989年度から始まった日ソ間の留学生交換政府奨学金制度や、90年代に入ってから、科研費補助金による研究プロジェクト<sup>26</sup>を利用して、研究者の海外渡航や国外の研究者の招聘が比較的容易になったという点は重要である。また一方では、ベレストロイカ以降、ソ連邦の研究者等の国外渡航や、一般の人々が外国人との接触を避ける傾向が薄らいだこと等も大きい。

### 3-2. ヤクート語・ドルガン語使用の見通しと研究視点

ヤクート語はヤクート（サハ）共和国という自民族の名を冠した共和国を背景に持っている言語であり、北東アジアの諸民族言語の中では有力である。都市部のヤクート人の生活には現在、インターネットを通じた IT 関連技術の恩恵が急速に普及浸透しつつある。ロシア語からの影響がこれらハイテクにより、より強くヤクート語に及ぶ可能性もある一方で、ヤクート語ベースの IT 通信を利用して言語保持が計られる可能性も大きく、実際、ヤクート語ベースのサイトも増えているようである。

ヤクーチヤにおけるヤクート語は、連邦崩壊前には周囲の少数民族話者にとってロシア語に加えて、あるいは、ロシア語以上に民族際語としての役割を果たしていた時期があった。政治経済面など社会体制の変革により、これらの人々は連邦崩壊前と比べて、ロシア語話者との直接の接触を多くもつようになった。ヤクート語は、相対的にサハ共和国内の言語的優勢を失う傾向にある。そのような中でヤクート語話者間にはヤクート語を保持し、民族の文化的遺産の継承を促進する動きある。2005年にはヤクート語の英雄叙事詩オロンホがユネスコにより「人類の口承及び無形遺産の傑作」に認定されたのはその動きを反映したものと考えてよいだろう。ソ連邦時代は、概して民族意識高揚につながる伝統の継承は冷遇される位置づけであったが、連邦崩壊後は、これらが見直され、既に失われつつある文化的継承も少なくないが、現在再評価されていると言えよう。英雄叙事詩オロンホは、文字による歴史記録を持たないヤクート語にとって、未だ定かではないヤクート語の形成過程を明らかにする上でも唯一の資料である。

ドルガン語については、ユーラシアで最後にチュルク化した言語コミュニティとして、ドルガン語話者がどのように言語を保持していくか、民族集団のアイデンティティとして

の言語、ドルガン語がどのように扱われていくか、言語の生態を研究する上で言語モデルとしても興味深い。

#### 4. 北東アジアのチュルク諸語にそそぐ日本からの眼差し

最後に、連邦崩壊後の北東アジア地域の言語研究にそそがれた日本からの眼差しと今後のこの地域の言語研究の見通しについて触れたい。

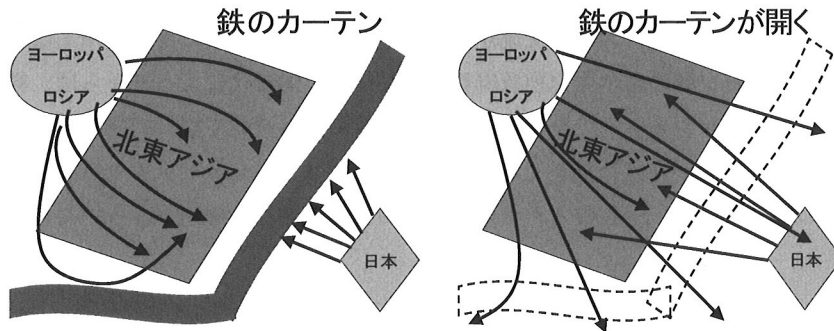


図3

図3に表したように、ソ連崩壊までの間、閉ざされていた厚い鉄のカーテンの向こうには、閉鎖的な中ではあっても、それ故にかえって、国策としての言語研究ということもあり、活発に北東アジアの諸言語を研究しているソ連邦の言語研究者らがいた。カーテンのこちら側には、北東アジアの言語への強い関心を抱いた研究者らがやはりいた。ソ連邦崩壊後、鉄のカーテンが開くと、連邦内の言語研究者にとってはそれまで国内の辺境の地に求めざるを得なかった言語研究の多様性への関心が、一気に鉄のカーテンの外側へ、旧ソ連邦国外へと向かった。そのことは連邦崩壊後のこの地域に関する特にヨーロッパロシア側からの学術的出版物の量が減少傾向にあったり、個々の研究者等の研究テーマからも感じられる。そして、この、やや衰退傾向にあった北東アジアの諸言語研究の空白を補完したのが、今度は、鉄のカーテンのこちらでせき止められていた研究者、北東アジア諸言語への関心を抱いていた日本側の言語研究者であった。連邦崩壊を経たここ20年足らずの間に、若手を含む日本からの言語学者等が、これを実現している。今後、この地域の言語研究は、現地の研究者の研究活動とともにオープンに展開されていくことになるだろう。

#### 注

- 1) 本稿は、2006年11月18日に札幌学院大学(北海道江別市)で開催された日本言語学会 第133回大会シンポジウム『ソ連邦崩壊と日本言語学——北東アジアにおける20年間のフィールドワークの歩み——』(司会・白石英才)において行われた「イテリメン語(チュクチ・カムチャッカ諸語)の概要」(小野智香子)、「極東にいろいろいるゼツングース諸語」(風間伸次郎)、「アルタイ

の仲をとりもつモンゴル諸語」(山越康裕)の講演に続いて、筆者が「北東アジアのチュルク諸語研究——日本からそそぐ北東アジアへの眼差し——」と題して行った講演内容に加筆し、まとめたものである。

- 2) 話者数についてソ連邦の最後の国勢調査となった1989年の国勢調査から、各民族出身者が自民族言語を母語とみなす率から算出した各言語の話者数をあげておく：ヤクート語35万8316人、トゥヴァ語20万3895人、アルタイ語5万9924人、ハカス語6万880人、シオル語9639人、ドルガン語5637人、カラガス語301人、チュリム・チュルク語はデータがない。
- 3) 同じく2002年のロシア国勢調査によって、ツングース系諸言語を話者人口(民族人口)の多い順に3言語あげれば、エウエン語6080(1万8642)人、エウエンキー語6780(3万4610)人、ナーナイ語3068(1万1569)人である(日本言語学会第133回太会予稿集 p. 23、風間執筆分を参照)。
- 4) ロシア連邦の最も新しい国勢調査は2002年に行われているが、1989年まで凡そ10年に一度なされた国勢調査で数値の上げられていた「母語保持率」のデータを割り出す質問は、調査項目からはずれたようである。
- 5) 1989年の国勢調査ではチュリム・チュルクの当該データは収録されていない。
- 6) ヤクート共和国(またはサハ共和国)は現在、ロシア連邦の共和国の一つである。ソ連邦時代はヤクート社会主義自治共和国として、ロシア社会主義共和国の領内にあった。この地域をヤクーチヤと称することもある。面積は日本の約8倍にあたる。
- 7) 『三省堂言語学大辞典』は『世界言語編』第1～4巻に続いて、同『補遺・言語名索引編』(第5巻)が1993年に、また『術語編』(第6巻)が1996年、『世界文字辞典』(別巻)が2001年に出版された。
- 8) 東アジア域のチュルク語及び古代語の項目は主に庄垣内正弘が、中近東および中央アジア域現代語の項目は主に林徹が執筆している。
- 9) 本稿の参考文献欄には、それらの極一部を掲げた。
- 10) これら文献の大半がロシア科学アカデミー東方学研究所サントペテルブルグ支部(旧ソ連邦科学アカデミー東方学研究所レニングラード支部)写本部に保管されている。
- 11) 一例を挙げれば、庄垣内(1995)、庄垣内・他(1998)、等。
- 12) 庄垣内(2003)、他。
- 13) *Proben der Volksliteratur der turkischen Stämme Südsibirien (Образцы народной литературы тюркских племен, живущих в Южной Сибири и Джунгарской степи)*, 7 Bde., St. -Petersburg 1866–1896.
- 14) *Versuch eines Wörterbuches der Turkdialecte (Опыт словаря тюркских наречий)*, 4 Bde., St. -Petersburg, 1888–1911.
- 15) 羽田とラドロフの交流については庄垣内(1998)に詳しい。
- 16) 特筆すべき文部科学省による大型プロジェクトに以下の特定領域研究がある。この研究に参加した多数の研究者の研究業績はELPR(Endangered Languages of the Pacific Rim)シリーズとして逐次刊行された。この大型科研費プロジェクトは世界各地の危機言語の調査、記述、文法研究における日本発信の研究活動の支柱となり、言語学界における危機言語研究への大きな貢献となった。

- ◎課題番号 11171101 「環太平洋の「消滅に瀕した言語」に関する緊急調査研究」(研究代表者: 宮岡伯人/研究受け入れ機関: 京都大学、大阪学院大学) [1999-2003年度] 特定領域研究
- 17) 本稿では、これまでの慣用に従い、ヤクート語を使用している。
- 18) この点については庄垣内 (1989) 「チュルク諸語」、庄垣内 (1992) 「ヤクート語」の項目を参照のこと。
- 19) 例えば、文脈や会話場面によって「ヤクート」とすべき場合、あるいは「サハ」とすべき場合が特にあるとは今のところ、考えられてはいない。
- 20) 代表的な例を一つあげれば、Пекарский, Э. К. (1907-1930) がある。
- 21) 最初のヤクート語話者により考案されたヤクート語アルファベットは、言語学者 S. A. ノブゴロドフ C. A. Новгородов が当時の国際音声字母(ラテン文字基盤)に基づき、考案したものである。このアルファベットを用いて、1917年に初等読本が出版されている。
- 22) シベリアの諸言語で1920~30年代に汎用の文字を獲得した言語は全てラテン文字基盤のアルファベットを使用した。1940年前後を境にソビエト政権の意向で、一斉にキリール(ロシア)文字基盤のアルファベットに移行した。この点については藤代(2001)を参照。
- 23) 北東アジアの諸言語研究に関する文献を年代別、特にソ連邦崩壊以前と以後に分けて整理した文献リストが注1に掲げたシンポジウムに参加したメンバー等によりまとめられている。そこでは国内外の古アジア諸語、ツングース系諸言語、モンゴル系言語(ブリアート語、ハムニガン・モンゴル語)、北東アジアのチュルク諸語の研究文献がリストアップされている。白石、他(2007)参照。
- 24) Barbolina, A., Fujishiro, S. (2001), p. 2.
- 25) 同上書。
- 26) チュルク語関連の主な科研費プロジェクトとしては以下が挙げられる。
- ◎課題番号08041022 「北・中央ユーラシアのチュルク系極小言語の調査研究」(研究代表者: 庄垣内正弘/研究受け入れ機関: 京都大学) [1996-1998年度] 国際学術研究学術調査
- ◎課題番号11691009 「ユーラシア周縁部チュルク系諸言語の調査研究」(研究代表者: 林徹/研究受け入れ機関: 東京大学) [1999-2001年度] 基盤研究(A) 海外学術
- ◎課題番号14251019 「チュルク系諸言語における接触と変容のメカニズムに関する調査研究」(研究代表者: 林徹/研究受け入れ機関: 東京大学) [2002-2004年度] 基盤研究(A) 海外学術
- ◎課題番号17320065 「ユーラシアの言語接触と新言語の形成——新言語形成のメカニズム解明に向けて——」(研究代表者: 藤代 節/研究受け入れ機関: 神戸市看護大学) [2005-2007年度] 基盤研究(B) 一般
- ◎課題番号18251007 「チュルク諸語における固有と外来に関する総合的調査研究」(研究代表者: 久保智之/研究受け入れ機関: 九州大学) [2006-2008年度] 基盤研究(A) 海外学術

#### 参考文献 (ロシア語アルファベット, ラテンアルファベット, アイウエオの順)

- Алпатов, В. М. (1997) *150 языков и политика: 1917-1997*, ИВ РАН, Москва.
- Барболина, А. (1999) “Итоги работы управления образования Таймырского (Долгано-ненецкого) автономного округа за 1996-1997 учебный год”, CSEL. vol. 1, стр. 55-63.
- Всероссийская перепись населения 2002 года* (<http://www.perepis2002.ru/index.html?id=11>)



(『2002年度全ロシア国勢調査』).

- Государственные языки в Российской Федерации* (1995), Academia, Москва.
- Долгих, Б.О. (1963) “Происхождение долган”, *Сибирский этнографический сборник*, Vol. 5.
- Пекарский, Э. К. (1907–1930) *Словарь якутского языка*, С-Петербург, Петроград, Ленинград.
- Парфирьев, В. (1999) “Проблемы сохранения и развития языков народов Севера”, *CSEL*. vol. 1, стр. 51–54.
- Российский статистический ежегодник 1999* (1999), Госкомстат России, стр. 68–70.
- Слепцов, П. А. (1990) *Изучающим якутский язык*, Якутское книжное издательство.
- Убрятова, Е. И. (1985), *Язык норильских долган*, Наука, Новосибирск.
- Языки народов СССР* (1966), т. 2 *Тюркские языки*, Наука, Москва.
- Barbolina, A., Fujishiro, S. (2001) *The collected works Ogdo Aksenova (text, translation, commentary)*, *CSEL series vol. 4*, 392p.
- CSEL series : Contribution to the studies of Eurasian languages series vol. 1–10.*
- Fujishiro, S. (1999) “Two linguistic materials from Dolgan in Tajmyr”, *CSEL*. vol. 1, pp. 75–103.
- \_\_\_\_\_ (ed.) (2004) *Approaches to Eurasian linguistic areas*, Kobe City College of Nursing, *CSEL series vol. 7*.
- Fujishiro, S., Shogaito M. (eds.) (1999) *Issues in Turkic languages : description and language contact*, *CSEL series vol. 1*.
- Kuribayashi, Y. (2004) “VO word order characteristics in Azerbaijani, Balkan-Turkish, and Bulgarian-Gagauz.” *Current Research in Turkish Linguistics*. (Imer, K. and G. Dogan (eds.)). pp. 37–44.
- 江畑冬生 (2004) 「サハ語 (ヤクート語) の二つの「複数接辞」」『東京大学言語学論集』23号、23–44.
- \_\_\_\_\_ (2004) 「サハ語 (ヤクート語) の後置詞」、*CSEL series vol. 6*、pp. 1–16.
- \_\_\_\_\_ (2005) 「サハ語 (ヤクート語) の接尾辞付加における交替」『東京大学言語学論集』24号、11–40.
- \_\_\_\_\_ (2006) 「サハ語 (ヤクート語)」中山俊秀、江畑冬生編『文法を描く：フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ』、東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所、pp. 25–50.
- 江畑冬生、Н. Попова (2006) 『サハ語文法』85p. 『サハ文法——テキストと練習問題——』188p. 『サハ語－日本語辞書』46p. 2006年東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所サハ (ヤクート) 言語語研修テキスト I－III.
- 大崎紀子 (2000) 「キルギス語の使役文について」『京都大学言語学研究』19号、p. 59–78.
- \_\_\_\_\_ (2004) 「キルギス語において使役が受動の意味をもつとき」『京都大学言語学研究』23号、pp. 85–114.
- 栗林 裕 (2004) 「ガガウズ語にみられる二重与格構文について」『日本語の分析と言語類型論』(影山太郎・岸本秀樹 (編))、くろしお出版、pp. 437–454.
- 『三省堂言語学大辞典』第1～5巻 (1989–1993)、三省堂、東京、(北東アジアのチュルク諸言語の項目については白石英才、他 (2007) を参照。).
- 庄垣内正弘 (1989) 「チュルク諸語」『三省堂言語学大辞典』2巻、三省堂、pp. 937–950.

- \_\_\_\_\_ (1992) 「ヤクート語」『三省堂言語学大辞典』3巻、三省堂、pp. 544-550.
- \_\_\_\_\_ (1995) 「ウイグル文字音写された漢語仏典断片について——ウイグル漢字音の研究——」『言語学研究』14、京都大学言語学研究会、pp. 65-153+9 pls.
- \_\_\_\_\_ (1998) 「羽田 亨とウイグル語文献の研究」『古代文化』50(8)、古代学協会、pp. 49-54.
- \_\_\_\_\_ (2003) 『ロシア所蔵ウイグル語文献の研究：ウイグル文字表記漢文とウイグル語仏典テキスト』京都大学大学院文学研究科、450p.
- 庄垣内正弘、L. トゥグーシェワ、藤代 節 (1998) 『ウイグル文 Daśakarmaphāvadānamālāの研究』、松香堂、x+293p.+84p.
- 白石英才、小野智香子、長崎 郁、風間伸次郎、山越康裕、藤代 節 (2007) 「北東アジアの諸言語にかんする注釈つき年代別文献リスト」、津曲敏郎 (編) 『環北太平洋の言語』14号、pp. 167-246.
- 菅原 陸 (2004) 「ウイグル語フェルガナ方言について」CSEL series 6, vol. 6, pp. 73-81.
- 西岡いずみ (2004) 「カザフ語の指示詞」CSEL series vol. 6, pp. 17-34.
- 日本言語学会第133回大会予稿集「ソ連邦崩壊と日本言語学——北東アジアにおける20年間のフィールドワークの歩み——」pp. 15-40 [pp. 15-16 (白石)、pp. 17-22 (小野)、pp. 23-28 (風間)、pp. 29-34 (山越)、pp. 35-40 (藤代)].
- 林 徹、梅谷博之 (編) (2004) 『チュルク系諸言語における接触と変容のメカニズム：研究調査報告』、CSEL series 6, 136p.
- 藤家洋昭、Bahat Duamef (eds.) (2004) 『実用カザフ語教本』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、224p.
- \_\_\_\_\_ (2004) 『カザフ語分類語彙集』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、63p.
- 藤代 節 (1990) 「ドルガン語の成立過程について」『内陸アジア言語の研究』vol. 5 pp. 155-184.
- \_\_\_\_\_ (1994) 「極北のドルガン語を訪ねて」『月刊言語』23(1) pp. 88-93/23(2) pp. 86-91/23(3) pp. 92-97/23(4) pp. 90-96/23(5) pp. 95-100/23(6) pp. 92-97 大修館書店.
- \_\_\_\_\_ (1997) 「北へ移動したチュルク語——ヤクート語——」北海道立北方民族博物館、Arctic Circle 24、pp. 15-17、網走.
- \_\_\_\_\_ (2001) 「ロシア文字による非スラブ系言語表記」『三省堂言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』、三省堂、pp. 1154-1163.
- \_\_\_\_\_ (2002) 「アイデンティティと言語変容」『京都大学言語学研究』19号、pp. 95-115.
- \_\_\_\_\_ (2004) 「ヤクート語英雄叙事詩オロンホのサイズ表現——オロンホの言語学的研究——」、CSEL series 7、pp. 205-259.
- 古屋 薫 (2004) 「ウズベキスタンにおける方言調査報告」、CSEL vol. 6、pp. 83-91.
- 松本 亮 (2005) 「エヴェンキ語、ヤクート語及びブリヤート語における人称接辞を伴う副動詞形について」『京都大学言語学研究』24号、pp. 153-184.

(FUJISHIRO Setsu)